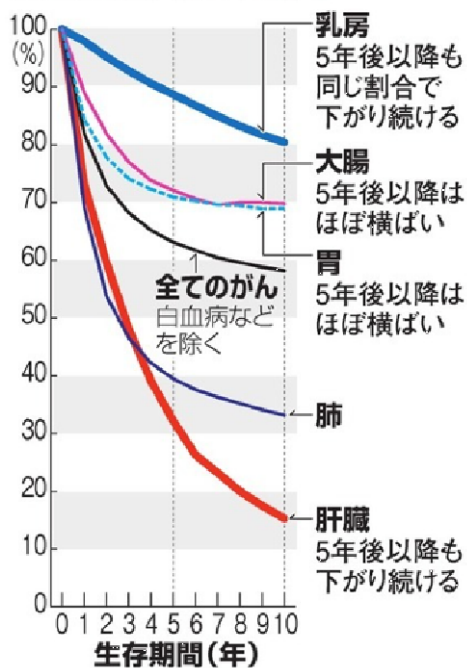


## ② 肝細胞がんの特徴

ここで、肝臓悪性腫瘍の代表格である肝細胞癌についてお話ししたいと思います。

### 部位別癌の生存率

#### 主ながんの10年生存率



#### 部位別 相対10年生存率

部位		I	II	III	IV	全症例	手術症例	手術率(%)	手術率(%)	追跡率(%)
食道 C15	症例数	312	335	402	269	1,440	596		41.5	91.5
	生存率(%)	64.1	36.9	15.4	4.8	29.7	35.8			99.2
胃 C16	症例数	3,706	519	661	1,128	6,413	4,726		73.7	93.8
	生存率(%)	95.1	62.7	38.9	7.5	69.0	73.6			99.3
結腸 C18	症例数	539	451	426	368	1,866	1,634		87.6	95.1
	生存率(%)	98.6	85.2	74.8	8.7	70.6	72.0			99.3
直腸 C19-20	症例数	365	319	328	196	1,249	1,139		91.2	96.7
	生存率(%)	94.1	83.3	63.0	6.0	68.5	68.2			99.4
大腸 C18-20 再掲1	症例数	904	770	754	554	3,115	2,773		89.0	95.7
	生存率(%)	96.8	84.4	69.6	8.0	69.8	70.4			99.3
肝 C22	症例数	388	498	426	265	1,700	463		27.2	93.9
	生存率(%)	29.3	16.9	9.8	2.5	15.3	29.8			98.9
胆嚢胆道 C23-24	症例数	85	88	66	183	562	313		55.7	75.1
	生存率(%)	53.6	20.6	8.6	2.9	19.7	32.2			98.9
膵 C25	症例数	57	99	126	513	895	334		37.3	88.8
	生存率(%)	29.6	11.2	3.1	0.9	4.9	11.1			99.7

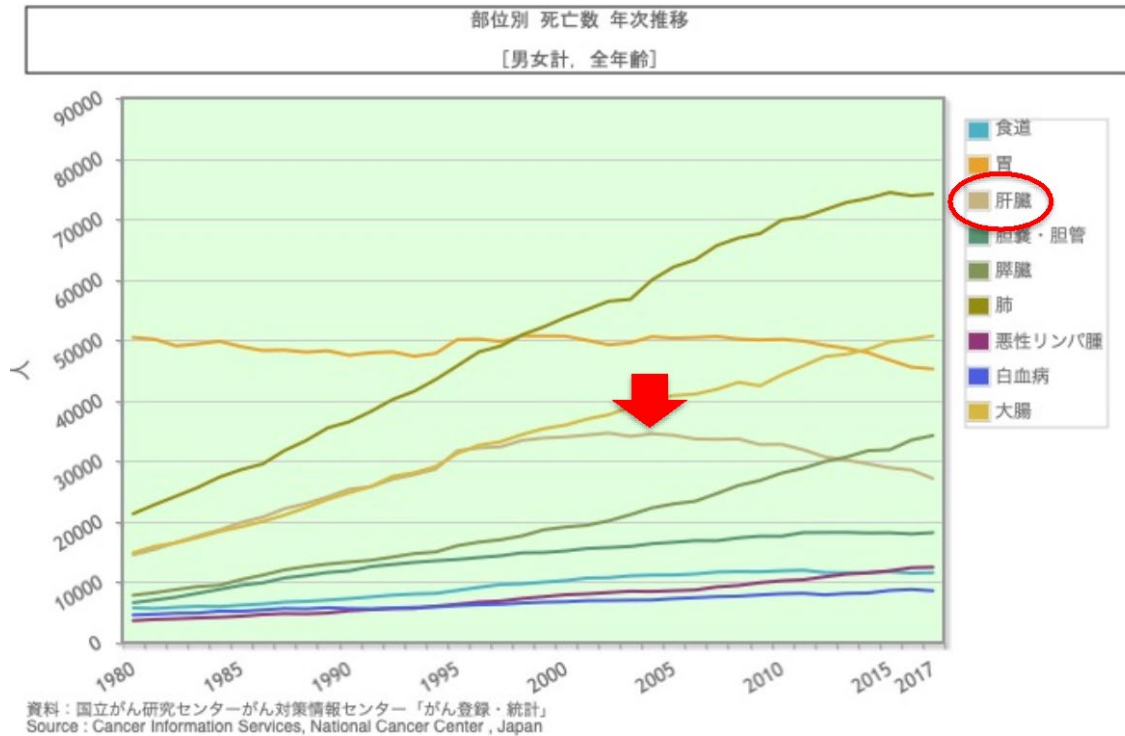
(全がん種公開サイトから一部抜粋)

全国がん(成人病)センター協議会発表 2016  
(医療介護CBニュース)

⇒肝臓自体が発がん地帯。  
治療を繰り返す症例が多い。他の癌との違い。

まず、疫学ですが図は5大癌の10年生存率です。残念ながら肝癌は、低い状態です。一方で、次の図は部位別癌死亡数の年次推移ですが、肝癌の死亡数は減少傾向です。

## 部位別癌死亡数の年次推移



## 肝臓は減少傾向、どうして？

予後が悪いのに死亡数が減少している理由はどうしてでしょうか？

それは肝臓、肝硬変の大きな原因である B 型、C 型肝炎の治療ができるようになり、発癌する患者さん自体が減っているからなのです。

10年生存率が低い一番の原因は、肝細胞癌が発生する方は、肝臓自体がすでに肝硬変になっていることが多いからです。手術しても、肝硬変である肝臓が残っている以上、新たな癌の発生源となる可能性があります。

無治療の C 型肝硬変の患者が、初めて単発（1 個）の肝細胞癌になってしまったとしましょう。手術療法で、うまく治療してもらいました。

その後の新しい肝細胞癌の発生率は、どれくらいなのでしょう？

**1 年で 15-20%, 5 年では、80%**といわれています。かなりの高率ですね。

しかし、悲観的にならないでください。C 型肝炎ウイルスの治療がうまくいけば（ウイルス除去）、発癌率は大きく下がることがわかっています。

**B 型、C 型肝炎のウイルス治療がとても大事なことが理解できますね。**

同様に、他の原因の肝硬変であっても普段から炎症を起こさないように治療をすることで発癌を抑えられるケースがあります。肝臓自体の炎症が、発癌を誘発してしまうのです。